

團十郎の歌舞伎上演と、成田山への参拝者たち

初代團十郎(1660-1704)による、江戸(東京)での成田山新勝寺不動明王の芝居が人気を博し、また当時の人々の余暇の時間が増えたこともあり、新勝寺へ片道 3 日間の旅を行う人々が増加した。

江戸時代(1603-1867)には、成田山新勝寺にくる参詣者のニーズに応えるため、食事処、宿泊処がオープン。寺院へと至る現在の表参道の原型となった。

市川家は、このような参詣者を成田に迎えるために何世代にも渡って関わってきた。七代目の市川團十郎(1791-1859)は、10 歳の時に一門の長となる(訳注：團十郎の襲名のこと)。彼は近代演技者の最高の名人と言われるようになり、市川一門の十八番(repertory)を作る。これは今日も演じられている。七代目団十郎は 1821 年に成田山へ最初の額堂（信者が奉納するものを掲げておく堂）を奉納する。ここではお茶屋菓子参詣者へと振る舞われた。

七代目が奉納した額堂は、残念ながら 1965 年の火事で焼失してしまうが、火災のあとに七代目の石像が修復され、今もある 2 代目の額堂に移されている。石像は今日も、成田山新勝寺全体を見守っているのである。

七代目團十郎はまた、1842 年、天保の改革の際に江戸を追放された際、延命院の保護も受けている。天保の改革は、質素儉約と自律を強制することで、経済の安定を試み、歌舞伎の劇場にまでそれを強いた。七代目團十郎は成田屋七左衛門と改名し、それ以来、延命院のシンボルとして、成田屋の三舛の紋(3 つの木箱が重なったマーク)を延命院で見ることができる。